

## ”ジェンダー平等先進県”へ ～私たちが描く、高知のミ・ライ～

配信期間：令和4年1月15日(土)～30日(日)

※この講演は、オンデマンド配信を行いました。



講師 <sup>じぶ</sup> 治部れんげさん（東京工業大学准教授／ジャーナリスト）

### 《講師プロフィール》

2021年4月より東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。ジェンダー関連の公職に内閣府男女共同参画計画実行・監視専門調査会委員、東京都男女平等参画審議会委員など(いずれも現職)。

著書に『「男女格差後進国」の衝撃』(小学館)、『ジェンダーで見るヒットドラマ 一韓国、日本、アメリカ、欧州』(光文社)等。



### 世界から見た日本のジェンダー問題

グローバルジェンダーギャップ指数、昨年日本は120位だった。

経済分野において「働いている人の男女比」を見ると68位と真ん中より少し上の順位であり、かなり女性も働いている一方で「仕事の賃金の男女比」や「管理職に占める女性比率」は低い。つまり「日本の女性は結構外で働いているが、リーダーシップのある職に就く人が少ない」ということになる。また、専門職・技術職に就く人も少なく、多くが非正規雇用のため収入が低いことから、女性が多い職種の賃金が低い、または低く抑えられていることを意味する。

### 根強い固定的性別役割分担

県や市町村議会に女性の議員はどれほどいるだろうか。女性が公的な領域に進出していくこと、男性が家庭や地域に進出していくことは表裏一体である。「男性が外で働き女性が家庭を守る」という固定的性別役割分担の考え方は、日本では根強い。男性には「仕事は辛くても弱音を吐かず、家庭を支えるために頑張るべき」という強い価値観があり、制度を創るだけでは今までの価値観を変え男女平等を実現することは難しい。

男女平等の話をするすると「女性が男性のように外で働けばいいのか」と聞かれるがそうではない。ジェンダー平等の本質は個人の自由であり、大切なのは自分と違う状況にある人の選択を認められるかどうかということである。

## 男性の家庭進出で未来を変える

高知県は、全国の中でも女性活躍が進んでおり頑張っている女性は多いが、それと同様に男性は家庭で頑張っているだろうか。

アメリカやドイツでは、男性の家事育児時間は大体女性の半分ぐらいある。しかし日本では、夫の家事育児時間が極端に短い。もっと男性の家庭参加を増やさなければならないが、男性の労働時間が長過ぎることが問題だ。女性は家事育児を引き受けるために離職し、家族を養うために男性の長時間労働がさらに進んでいく。地域からジェンダー平等を進めていくためには、家庭で男性の参加を進めていくことが大事だ。単に女性が能力を発揮して働くだけでなく、男性も家庭や地域で責任を果たせるような仕組みに変えていく必要がある。

今の日本の男女格差は大きい。この現状を出発点とし、10年、20年後にどうなっていて欲しいのか、理想から考えて現実とのギャップをどう埋めていくか。大事なのは、理想像を考えると同時に今ある問題を直視すること。つまり、家庭から地域を変えていくことが世界を変えることにつながる。